

ASEAN グローバルプログラムと 自分自身

平 樂 順 平
Jumpei HEIRAKU
情報メディア学科 2年

1. はじめに

2018年8月28日から9月6日にかけて、ベトナムとシンガポールにおいて、企業訪問や大学見学、講演会等のコンテンツを持つ ASEAN グローバルプログラムに参加した。各プログラムの日程を表1に示すが、私が最も学んだと感じたことがハノイ工業大学生とのPBLであったため、ここでは特にそれについて報告する。

表1 プログラムの日程

8月28日(火)	ベトナム 入国
8月29日(水)	現地企業訪問
8月30日(木)	現地大学生とPBL(調査)
8月31日(金)	現地大学生とPBL(発表)
9月1日(土)	観光
9月2日(日)	シンガポール入国 企業訪問
9月3日(月)	大学訪問 NTU 学生懇親会
9月4日(火)	企業訪問 加藤さん講演会
9月5日(水)	自由行動
9月6日(木)	帰国

2. 参加目的

私は今回のプログラムに参加するにあたり、以下のことを目的とした。1つ目は『自分の英語力がどの程度通用するか知ること』であった。私は、自分の英語力が低く、英語の成績も良くないと思っている。しかし、このプログラムは英語力を問わない応募制の科目であったので、英語力がなくてもどこまで外国人に伝わるか試してみたかった。そして、その結果を踏まえた上で、今後の英語の講義への姿勢

改良をしていきたいと思った。2つ目は『海外の世界観や文化を知ること』だ。私は、昔から海外に行ってみたく、いろいろな世界観を見てみたかった。しかし、一人で海外に行く勇気がなく、海外留学プログラムだとかなりの費用がかかってしまう。今回のプログラムは、8泊10日で2カ国に行くことができ、大学の科目という安心感もあったので、これを機会に海外の世界観や文化を知りたいと思った。

3. 研修内容

3.1 ハノイ工業大学生とのPBL

PBLとは、組織で仕事をする場合に近い仮想ワークを体験する手法で、今回はベトナム人を対象にアンケート調査を行い、「飴」をどうしたらより売れるのかを目的として、日本人5人に対してハノイ工業大学生2人のチームで、2日間にかけて共同作業を行った。

現地ではまず、はじめにチームメイトになるハノイ工業大学生2人に自己紹介があった。渡航前にお互いSkypeやMessageなどで会話をしたので、おおよそ顔と名前が一致していた。その後のミーティングでは、事前に日本チームだけで話し合ったアンケートの内容改良を行った。僕らが事前に作ったアンケートはベトナム学生からするとわかりにくかったようで、もっと丁寧なものではないことが判明した。なので、アンケートを『飴についてどんな飴が好まれているのか』『どんなパッケージが良いか』『炭酸の飲み物は好まれているのか』など、簡潔な文に作り直してからフィールドワーク(アンケート調査)を行った。場所はハノイ工業大学とイオンモールの2カ所で行えた。初めに大学内で行ったが、ハノイ工業大学生が2名いるため、2グループに分かれてアンケートをとることにした。教室や、ベンチに座っている学生にアンケートをお願いしたが、英語が通じない学生も居り、ベトナム語で返事をされるため、ベトナムの学生がベトナム語で説明することが多く見受けられた。そのおかげで、円滑に進めることができたが、ベトナムの学生

の負担が大きく、日本人学生は何もできないのが現実だった。その後1日目のアンケートを集計し、自分達がどういう鮎を売り出すのかをまとめた。

2日目、そのアンケートをベトナム語で作成し直し、答えてもらいやすくしてみた。この改善のおかげで1日目より時間は短かったものの、たくさんの回答を得ることができた。その結果をすぐに集計し、発表用の用紙に見やすくまとめ、プレゼンの準備をおこなった。英語でのプレゼンは僕たちには難しく、ほとんどハノイ工業大学生が行ってくれた。英語ができないだけで、ここまでの存在感の無さが生まれるのかと思うと、まだまだ学ぶべき事がたくさんあると感じた。

一方で、僕達のグループのベトナムの学生は何事にも進んで親身に行ってくれる優しい二人であり、まるで、身内のような優しさを感じた。お昼ご飯も自分たちのおすすめのご飯や、飲み物も紹介してくれた。よって、英語が苦手な私でも伝えようとすれば通じるし、伝えようとする思いが自分に伝わればコミュニケーションはとれるものと思った。

4. おわりに

このプログラムに参加して、初めての海外で困惑することが多く、未だかつて経験したことのない環境を知ることができた。日本語が通じない環境、英語力があってもコミュニケーションがとれなければ通じない、自分のレベルが目に見えた良い経験をさせて頂いた。ベトナムの学生と話すことで、漠然とした英語では物事を正確に伝えることが非常に難しいものであることを痛感した。同じ単語でも、発音で解釈の違いがでるなどの気を付ける点がはっきりと見えて、自分の改善点をしっかり把握するのに

良い環境だった。

日本で過ごすうえでは、考えられない環境で、私たちは日本語が当たり前で、ベトナムではベトナム語が当たり前なので英語も完璧な人は少なく、シンガポールでは第三言語を習得するのが決まっているというように、同じアジアでもこんなに生活が違うのが衝撃的だった。そんな衝撃を感じる国は他にもまだまだあるのかと思うとまったくたくさんの国に訪れてみたいと思った。私たちが今回行ったベトナムとシンガポールは、196カ国もある世界中の国数からするとほんの一部にしか過ぎず、自分自身が小さく見えた。残りの人生が長いようで短いと思うので、世界をもっと見て自分の価値観に孤立せず、いろいろな考え、経験、想像、感情、物語などたくさん学び自分自身が少しでも大きい存在になりたいと感じた。

ベトナムの学生との交流はかなり言葉の壁が大きく、自分にはかなりレベルの高いものだった。自分の知っている英語の知識では足りず、翻訳機能に頼ることが多い事ばかりだった。しかし、それでも英語が身近になったし、英語の講義より英語が身に付く速度が速かったように思う。英語での生の会話は日本では味わえないことだし、何か不明なことがあればベトナムの学生は聞いてくれたので言葉の練習というより会話の練習ができ、正しくはないかもしれないが、生きた英語が学べる良い経験だった。英語だけでなく海外の考え方や価値観、文化ももちろん学べた。

最後に、このプログラムに関わってくださった先生方、企業様方ありがとうございました。今回の経験を糧に、新たな自分に成長していきます。